

雪を楽しみに変えて
さっぽろ雪まつり

ライトアップされた大通会場

さっぽろ雪まつりは、今年二月、五三回目を迎えました。

戦後の混乱期において、北国だからこそ雪を耐え忍ぶのではなく、楽しみに変えていくという逆転の発想のもと、冬の暮らしに光りを求めて開催され昭和二十五年の初回の雪まつりが予想以上の成功を収めてから半世紀。さっぽろ雪まつりは札幌市の発展と密接に関連しながら世界的スケールのイベントへと成長を遂げてきました。

さっぽろ雪まつりの誕生

昭和二十四年初秋、札幌観光協会の主査をしていた近藤直人氏は、丸井デパートの宣伝担当の石田篤郎氏に世直しの名案を尋ねると、「札幌で冬に市民を戸外に誘い出す行事を、例えば雪捨て場となっている大通を中心に雪像競技会や商店街協賛大売出しを実施できたらエライ観光行事になりますよ」といわれ、以前見た小樽の小学校の雪像展を思い出して、「これだ」と決意して、大通公園での雪のイベントを実施すべく行動に移しました。当時、冬の札幌の名物行事だった札幌一中（現札幌南高校）の雪戦会や中島公園の氷上カーニバル（仮装スケート）の要素も取り入れ、雪まつりは開催に向けて進んでいきました。

昭和二十五年二月十八日、大通公園西七丁目市内六校の中・高校生が制作した六基の雪像をバックに、ダンス、歌謡コンクール、仮装行列、映画会等が行われました。早朝から市民が会場に詰めかけ、当時としては空前の五万人の観客（当時の札幌の人口三十一万人）を集め、大成功を収めました。市民がいかに冬のレジャーを渴望していたかを物語るものであり、これをきっかけに、札幌市では、年間行事のひとつとして、翌年も継続して開催することになりました。さっぽろ雪まつりの幕明けです。

大雪像時代、世界の雪まつりへ

第四回では、「昇天」と名のついた高さ一五メートルの大雪像が初登場、第六回から、陸上自衛隊が雪像作成に参加することになり、精巧で華麗な大雪像時代が始まりました。

第一〇回では、まつりの大型化に伴い、さらなる円滑な運営を行うために、「さっぽろ雪まつり実行委員会」が発足しました。

昭和四十年の第一六回からは、真駒内が第二会場となり、家族連れを対象とした滑り台雪像など実際に雪に触れ、遊ぶ喜びを味わう会場として、大通会場は雪像やイベントを見て楽しむ会場として、会場ごとに特徴を打ち出しました。

昭和四十三年の第一九回では、アメリカのAP通信社が大々的にさっぽろ雪まつりを世界に配信。また、アメリカの月刊誌も雪まつりの特集を組み、一気に国際色を強めました。

そして迎えた札幌冬期オリンピック開催の年、昭和四十七年には大通・真駒内の両会場に加え、オリンピック会場に高さ二五m史上最高の雪像が製作され各国選手団を歓迎しました。この雪像を製作するのに五トントラックで千三百台分（現在全会場で七千台）六千五百トンの雪を使いました。

昭和四十九年の第二五回では、オイルショックが雪まつりを直撃、雪運搬の油不足で、一時は開催も懸念されましたが、関係者の努力により、開催にこぎつけることができました。また、不足分の雪を補うため、ドラム缶八百本やパネルなどを利用して雪像を製作しました。そうした苦労の一方で、初めて「国際雪像コンクール」を大通会場で開催し、六チームが民族豊かな雪像づくりを競い、まつりに更なる華やかさをもたらしました。これは、前年にカナダのケベック市に招待され、当地の国際雪像コンクールに参加した雪像制作団から国際親善のすばらしさが報告されたのを受け、実現に至ったものです。

昭和五十四年には第三〇回を記念して、世界的



国際雪像コンクールで優勝したマレーシアチーム



全国から集まったボランティアによる雪像

すずきの会場は、すずきの観光協会を事務局とした「すずきの氷の祭典実行委員会」を設置し、運営を行っています。

また、数年前から市民ボランティアが会場運営に参加していますが、今年からは市民の手による大雪像制作も始まり、雪まつりを支えていく新たな市民参加の体制づくりに取り組んでいるところです。

雪まつりを担う体制

さっぽろ雪まつり実行委員会は、札幌市経済局観光コンベンション部と札幌観光協会が事務局を構成し、まつり全体に係る会場管理や広報、関係機関との調整を行うほか、国際雪像コンクール、市民の広場、開会式等の行事を直接実施しています。

会場担当の実行委員として、新聞社・TV局が真駒内会場や左記以外の大通会場を受け持ち、各雪水像のテーマを決めて制作し、ステージイベント等を実施しています。そして、自衛隊が、雪まつりへの支援協力として、雪輸送、大雪像の制作、真駒内駐屯地の開放（真駒内会場）を実施しています。

な芸術家（故）岡本太郎氏に雪像のデザインを依頼し、制作された大雪像「雪の女神」は、人々の目を奪いました。第三四回からは「すずきの」が正式に第三会場となり「すずきの氷の祭典」と銘打ち、クリスタルな氷像主体の会場が誕生しました。また、第四四回からは、大通西二丁目目を「市民の広場」として新設しました。

第四七回からは、インターネットを使用して雪まつり情報の発信や雪像テーマの募集、それに基づいた雪像の制作も開始しました。

平成十一年、さっぽろ雪まつりは記念すべき五〇回を迎え、歴史展、花火大会、記念コンサートなどの記念行事を実施するとともに、記念誌を発行し、半世紀の歴史を振り返りました。

雪まつりの魅力と効果

さっぽろ雪まつりの象徴といえる大雪像・大氷像の精巧なつくり、芸術性の高さは、世界中のどの雪まつりにも負けないものですが、とくにそのスケールの大きさは感動を呼び、語り継がれ、毎年多くの観光客が訪れています。

ちなみに、観光客は前回（第五二回）延べ三三万四千人、実人員一九五万四千人、このうち道外からは三三万二千人、外国人は三万三千人となっています。

また、会場ごとに特色を持たせ、幅広い層に受け入れられる会場を構成し、数多くのステージイベントや市民による雪像の制作を展開していることも、市民や観光客から受け入れられる大きな魅力となっています。

これら観光客誘致等によってもたらされる雪まつりの経済波及効果は推計二六八億円（平成十一年第五〇回開催時の調査）ともいわれ、道内経済への寄与は多大なものとなっています。

第五三回さっぽろ雪まつり

今年は、二月五日（火）から十一日（月）の七日間、三会場で大小三百十二基の雪水像に、多彩なイベントが繰り広げられて、延べ三二九万七千人が会場に訪れました。

今回は、サッカーワールドカップ大会の日本・韓国共同開催を記念して、韓国の歴史的建造物「光化門」の大雪像も制作、日韓合同のヨソコイチームも結成されるなど、国際色豊かな純白の夢よぶ世界のひろばとなりました。

また、今年から始まったボランティアによる大雪像制作により、今後ボランティアの輪が一層広がっていくことでしょう。

さっぽろ雪まつり実行委員会



氷の祭典でにぎわう夜のすずきの会場



すべり台で大喜びの子供たち 真駒内会場



第1回のさっぽろ雪まつり風景